

「踊るようにホームインした」と書く、それは誇張した比喩的表現になるが、新庄剛志の場合は、比喩でも誇張でもなく、それが正確なリアリズム表現になる。プレーオフ、日本シリーズの新庄は毎日踊っていた。ダンス、ダンス、ダンス！

日本シリーズ第1戦の6回表、新庄は右中間を破る安打を放った。二塁には滑り込まなくてもセーフになりそうなタイミングだったが、新庄はあえて滑り込んだ。それもかなり遠い場所で踏み切って、空中遊泳するように手をひらひらさせながら、いろいろな滑り込みを見てきたが、あんな派手な滑り込みははじめて見た。

この日の新庄は第1打席が死球、第2打席が犠飛、第3打席が滑り込みの二塁打、第4打席はドラゴンの井端弘和に好捕された三遊間のヒット性のゴロだった。第2打席の犠飛は同点に追いつく貴重なものだったし、二塁打はダレ気味の試合を活性化させる派手なもの、第4打席のゴロは、抜けていけばチャンスが一気に広がるというあたりで、井端の好守備も新庄によって引き出されたといえないこともない。

4打席全部の内容が違い、しかも試合の帰趨になんらかの形でからんでいるところに新庄の真骨頂が見て取れる。4打数4安打しても、試合の結果とはあまりかわりを持たない選手も珍しくないから、記録上は2打数1安打1死球でも価値は高い。こうした印象的なプレーを、すべて意図してやっているはずはないのだが、なんとなくそう思わせてしまうものが新庄にはある。

プレーオフのとき、北海道のラジオが面白いデータを紹介していた。今年のレギュラーシーズン、ファイターズのホームゲームで4万人以上の観衆を集めた試合は8試合あった。札幌ドームは4万3000人あまりがリミッ





トだから、ほぼ満員といってよい。当然声援を受けたファイターズは強く、8試合して1度しか負けなかったが、中でも新庄の成績は際立っていた。29打数10安打、打率にして・345を記録したというのだ。シーズンの打率が・258に過ぎない男が、満員の観客の前となると、打率を1割近くも上げる活躍を見せる。人目の多いところで強い。実にわかりやすいというべきか。

札幌も名古屋もともに超満員になったプレーオフ、日本シリーズを通して、新庄が活躍するのはデータからいっても当然だったのである。

テレビを見ていた人からのまた聞きだが、ゲスト解説に出た清原和博が、新庄を評して、「オールスターに出ているみたいだ」というていたという。さすが清原、鋭い観察である。そう、プレーオフ、日本シリーズは、新庄にとってオールスターと同じなのだ。

真剣にちやらちやらして、  
全力プレーをする男。

普通の選手にとって、プレーオフ、日本シリーズとオールスターとは対極に位置するものである。プレーオフ、日本シリーズは優勝のかかった究極の真剣勝負、一方のオールスターはリラックスしてプレーするお祭りというのが多い選手の位置付けだろう。ところが新庄にとっては両者はほとんど差がない。満員の観客が集まり、多くの報道陣が押しかけ、ひとりひとりの選手に集まる視線が、レギュラーシーズンの数倍になる。日本シリーズもオールスターも、試合の日、日本でプロ野球がおこなわれているのはその球場しかない。大観衆の集まる試合で抜群の働きを見せる新庄にとって、この状況は本質的に同じなので、どちらが真剣勝負だとか、どちらがお祭りだとかいった違いはないのだ。

だからプレーの質も変わらない。オールスターでも日本シリーズでも、ちやらちやらししているといえはしているし、真剣にやっ

[密着レポート]

# 新庄剛志

Tsuyoshi  
Shinjo  
Fighters

## 「最後のSHINJO劇場」

日米合わせた生涯打率は約2割5分。数字上では突出した選手ではなかった。だが大舞台には滅法強かった。ファンが多ければ多いほど、俄然燃えるタイプなのだ。日本シリーズの舞台でも、ハリウッドスター並みの白い歯をキラリと輝かせ、ハッスルプレーでチームを牽引した34歳。そこに去り行く者の悲壮感はなかった。「いつでも野球を楽しもう」。新庄剛志は最後まで己の生き様を買ったのだ。

Baseball  
Final  
2006

阿部珠樹=文  
text by Tamaki Abe

杉山ヒデキ=写真  
photographs by Hideki Sugiyama





るといえばそうともいえる。いや、真剣にちやらちやらしながら全力プレーを見せるのが新庄のスタイルなのだ。一昨年のオールスターで見せたホームスチールと、今年のシリーズ初戦のダイビングみたいなスライディングは、本質的に同じものである。

そういう新庄流は、野球の保守本流からは評判が悪い。ある意味では新庄の師ともいえるゴールデンイーグルスの野村克也監督は、新庄の潜在能力には高い評価を与えながら、そのパフォーマンスマンも含めたプレーぶりにはいつも苦言を呈してきた。「白い歯を見せすぎると日本シリーズの新庄のプレーぶりを批判したスポーツ紙のコラムもあった。

しかし、そうした批判は日本シリーズとオールスターを対極にあると見ているからで、新庄のように同じ平面にあるととらえる人間には、おそろしくきつした声は届かないだろう。

普通の選手の中にも、日本シリーズとオールスターを同じものにとらえる感性の持ち主はいくつかもいない。しかし、そうした選手の多くはオールスターではリラックスしすぎて手抜きのプレーになり、日本シリーズでは緊張しすぎて本来のプレーができない選手が圧倒的ではないだろうか。日本シリーズとオールスターを同一視し、本質的に変わりのないプレーを見せられる選手は限られている。昔でいえば長嶋茂雄、現役なら新庄の本質を鋭く見ぬいた清原和博など特別な選手たちである。普通の選手がやってみたいと思いついてやってみることを、ハリウッドスターみたいない白い歯を見せながら、やすやすとやってみる男。それが新庄剛志なのだ。

新庄はタイガースのタテジマのユニフォームを着ていたころから目立つ選手ではあったが、今ほどの優れたパフォーマーではなかった。人気チームゆえの自己規制もあったし、プレーに自信を持っていない部分もあった。今のようなスタイルに自信を持ったのは、メジャーリーグでのプレー体験が多分に影響し

ているのだろう。

メッツに入団した新庄は、開幕デビュー戦でヒットを打ったし、ワールドシリーズにも日本人野手として最初に出場して安打を打った。最初の本塁打は本拠地の開幕戦だった。目立つ場面をさらうのは今と同じだが、それだけでメジャーは認めてくれない。パフォーマンスタにして同じで、変わった格好をする目立ちたがり屋は山ほどいる。そういう連中を見慣れているメジャーの中で、真に認められるのはプレーの質の高さしかない。

新庄のメジャーデビューは代走だった。一塁走者で出て、つぎの中飛のときタッチアップからスタートして二塁に進んだ。セオリーを破るプレーだったが、相手が新庄の脚を知らず、無警戒だったことを見ぬいた上での走塁だった。

ヤンキースとの交流戦では一塁に猛烈なスライディングを見せたこともある。併殺阻止がねらいだったが、それ以上に、ヤンキースにやられっぱなしのメッツのチームメイトの闘志を鼓舞するようなプレーだった。これにはヤンキースのジョー・トレ監督も賞賛を惜しまなかった。

見た目の派手さだけではわからないクレバーなプレーやチームの士気を考えたガッツのあるプレーによって、新庄はチームの信頼を得ていった。

個性を出して目立つのはいい。しかしそれをみんなに認めさせるには、プレーの質を上げるしかない。それが新庄がアメリカで得た一番大きな教訓だったろう。

そしてファイターズではそれを思う存分実践した。お面をつけて登場したり、奇術師みたいな見世物を胸を張ってやるのは、自分のプレーの質が仲間に見られる水準を保っているという自信の表れと見るべきだ。

リーグ優勝を決めたとき、新庄と並ぶチームリーダーである小笠原道大のコメントが印象的だった。

「シリーズに勝って、ツーさんを胴上げした



い」

ツーさんというのは新庄の愛称である。野球一筋の武芸者みたいな小笠原は新庄とは水と油と見られていた。実際、それほど親しいとも思えない。しかし、その小笠原をして、「胴上げしたい」といわせたのは、新庄のプレーの質が、表面的な観察以上にずっと価値があるということだろう。プレーオフや日本シリーズでの右ねらいの打ち方や果敢な走塁は、そのことをはっきり示している。

惜しまれる引退には、  
新庄としての必然があった。

「新庄劇場」などと人はいう。「劇場」である以上、いつか幕は降りる。幕引きのタイミングを決めるのは演出家の仕事だろうが、この男は自分でそれを決めてしまった。しかも、まだシーズンという幕が上がったばかりの時点で。

本来なら「今年で辞める」と公言した選手が、シーズン中ずつと試合に出つづけたばかりか、プレーオフ、日本シリーズにまで出場するなど考えられないことである。それだけやれるなら引退などする必要はないし、やれる力が残っているのに引退するのはファンにもチームにも失礼だ。

4月に新庄が引退を表明したときは、正直、軽率なことをするなあと感じたし、シーズン中に活躍する場面を見て、もったいないと感じました。

だが、プレーオフ、日本シリーズでじっくり彼のプレーを見て、引退が妥当なもので、タイミングもこれしかないかと納得させられた。鏡を見るのが好きな男は、さすがに自分のことがよくわかっている。

プロ野球選手としての新庄を支えてきたのは脚と肩、特に脚の方である。外野フライで一塁からタッチアップして二塁を奪ったメジャーデビューのことは紹介したが、あのころ、つまり5年前の新庄の脚力はイチローと肩を並べるものだった。その強靱な脚力、細くス

マートではあるが恐ろしくしなやかな下半身が、レーザービームといわれる送球の原動力にもなっていた。

その脚力に明らかに衰えが見えるのだ。日本シリーズで驚く場面があった。第3戦の7回表の守備である。谷繁元信の打席で、新庄は打球の傾向に合わせて右中間寄りに大きく守備位置を変えていた。しかし谷繁の打球は二遊間を抜けて中堅の定位置付近に飛んだ。

全盛期の脚力があれば、おそらく新庄は打者にふたつ目の塁を与えまいと猛然と打球に向かい、処理したはずだ。しかし、このときの新庄の追い方にはかつての迫力はなかった。

猛然と打球に突進し、すばやく捕球して二塁にみごとな送球をしたのは左翼の守備位置にいた森本稀哲だった。残酷な新旧交代の場面だった。

この試合、ベンチは9回、新庄に代えて守備要員を送った。守りで交代するのだから、よほど脚の状態が悪いのだろう。太ももやアキレス腱の故障は持病となり、ほとんど回復不能になっているという。

新庄がそのことに特別な悲壮感を持っているとは思えない。ただ、今の脚力では新庄らしさを見せられないことはよくわかっている。新庄剛志が新庄剛志を見せられなくなったこと。引退の理由はそこにある。

かつて王貞治は、引退に際して、「王貞治のバッティングができなくなった」と語った。これはプロの選手すべてに当てはまる至言だろう。プロなら誰もが自分の「らしさ」を自覚している。新庄のような選手はなおさらだ。そして「らしさ」が見せられないと感じるときが、ユニフォームを脱ぐときなのだ。

野球のつぎに新庄がなにをするかは知らない。なにをしてもわれわれを楽しませてはくれるだろう。しかし、その魅力も、あくまでも野球が元になって形作られたものであることを忘れてはなるまい。われわれが愛し、新庄自身が誇りを抱いていたのも、やはり野球選手としての新庄剛志なのである。

## Tsuyoshi Shinjo Fighters

- 1972年 1月28日、長崎県に生まれる
- 1989年 ドラフト5位で阪神に入団
- 1992年 亀山努と共に「亀新フィーバー」を巻き起こす
- 1993年 背番号を5に変更
- 1995年 「センスがないから辞めます」。突然の引退宣言も、2日後に撤回
- 1999年 巨人戦で横原寛己投手から「敬遠球サヨナラ安打」を放つ
- 2001年 メジャーリーグのニューヨーク・メッツに入団
- 2002年 サンフランシスコ・ジャイアンツに移籍。日本人として初めてワールドシリーズに出場
- 2003年 ニューヨーク・メッツに復帰するが、打撃不振でマイナー落ち。北海道日本ハムファイターズに入団し、登録名をSHINJOに。背番号は1
- 2004年 オールスターゲーム第2戦、ホームスチールを決めるなどで活躍し、試合前の宣言通りMVPに輝く
- 2005年 6月5日の対中日戦で日米通算200号本塁打を達成
- 2006年 4月18日の対オリックス戦の本塁打に「28年間思う存分野球を楽しんだぜ。今年でユニホームを脱ぎます打法」と名付け、引退を表明
- 9月27日のレギュラーシーズン最終戦、プロで最初につけた背番号63で試合に臨む。チームがシーズン1位通過を決めた試合終了後、引退セレモニーを行った

